

漢字というものは本当に素晴らしいもので、あらゆる学問の基礎、日本人にとっては基礎中の基礎なのです。この力を伸ばして、より多くのものを身につけさせてやるということが、教育でいちばん重要なことです。

子どもには自ら進んで学ぼうとする本能があるから、それを正しく伸ばしてやり、自ら求めさせるような環境をつくって、いたずらに詰め込んで口を開けて待つような子どもに育てないでいただきたいのです。

今の幼児教育は、あまりにもいろんなことをやり過ぎます。欲を出さなくていいのです。あれもこれもできるということは、何もかもいい加減にしかできないという欠陥を、当然秘めているわけです。昔から「多芸は無芸」といいます。何もかもできるということは、何もできないということに通じます。

一芸に秀でていればいいのではないですか。その一芸の、いちばん基本になるものは何でしょうか？ それは、まず読解力を養うことです。読解力を養うためには、その基本である漢字を身につけねばなりません。これさえやれば、どんな道でも自然に聞かれていきます。

幼児に対する漢字教育は、詰め込み教育であってはいけません。そういうやり方をすると、最初は興味を持って間もなくそっぽを向くようになります。そうなるとう伸びなくなります。子どもは自分で知りたがって

いるということを、いつも念頭に入れておいてください。

子どもが持っている“目分から求める”能力を生かすようにしないと、子どもは親から指示されなければ何も考えようもしないし、学ぼうともしなくなります。まして自分の頭を使って、新分野を開拓する気持ちは起きるはずがありません。

今の教育は、子どもたちが本来持っているヤル気の芽を摘むようなやり方です。

私の漢字教育の基本は、「漢字で教える」ことです。大人が「漢字を使う」ことです。大人が使ってみせることで、かたわらで聞いている子どもの言語生活が豊かになっていくのです。

いちばん必要な能力は、本を読む力です。楽々と読むのと苦労して読むのでは、一生の間に大変な違いが出てきます。子どものときから本を読めるようにする、本に興味を持たせるためには、幼児期からの漢字教育は不可欠です。

小学校から漢字を学ばせる　これが常識になっている今日の教育者の認識では、まったく理解におよばないでしょう。しかし幼児期からやればどんな子どもだって容易に本が読めるようになります。ところが大事な幼児期を無為に過ごして、小学校へ入ってから始めるので、苦労しても身につかないだけなのです。